

令和元年6月24日現在

機関番号：37402

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02597

研究課題名（和文）台湾「蕃地」の物語及び台湾原住民表象の生成メカニズムの解明

研究課題名（英文）Reading Taiwan: Banchi (Savage Land) Stories and the Structure of Formation of Taiwan Indigenous Imagery

研究代表者

小笠原 淳 (Ogasawara, Jun)

熊本学園大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70634137

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本統治期台湾の山地原住民居住地「蕃地」を題材に描いた物語の生成に、「神話」「ロマンス」「文明と野蛮」という要素が密接に関係していることに注目し、その生成メカニズムを解明したものである。本研究成果は『東亞視域中的作家流徙與文學創生 國際學術工作坊』（武漢大学）をはじめ三つの国際学術研究会にて詳しく発表した。中村地平、真杉静枝らの戦前の「蕃地」テキストに顕著なロマンスのプロットが、戦後の坂口れい子のテキストにも意識的に取り込まれていることを解明し、また坂口、津島祐子の「蕃地」物語の生成過程には霧社事件の「暴力の記憶」、特に暴力と女性という歴史の暗部が炙り出されていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、先行研究にはない新たな視点から日本統治期台湾の「蕃地」物語の系譜の構造を読み解いた点、並びに新たな「蕃地」小説を発見したことである。この発見は「蕃地」の物語の系譜に書き加えることができ、今後の「蕃地」の物語の研究に寄与することができる。

本研究の社会的意義のひとつは、日本統治期台湾の「蕃地」における事件の記憶や人的交流の記憶を鮮明に留めている日台の「蕃地」の作品群を新たな視点から読み解くことで、当時の状況を正しく把握し、歴史上の日本と台湾原住民の交流の記憶や事件の記録、その光と影を風化させることなく後世に留めていくことにある。

研究成果の概要（英文）：This research explains the structure of formation of banchi (savage land) stories during the Japanese period on Taiwan (1895-1945) through three factors, 1. myth, 2. romance, 3. the opposition between culture and savagery. The results of this research have been reported on in detail in international research symposia such as Writer's Migrations and Literary Creations in East Asian Horizons - An International Academic Workshop (Wuhan University, China). This research proved that postwar banchi writer Reiko Sakaguchi consciously introduced romance plots from Chihei Nakamura, Shizue Masugi and other prewar authors' banchi texts, and discovered that Reiko and Yuko Tsushima critically inherited the "memory of violence" of the Mushi (Wushi) Incident; in their own banchi texts they re-present the relation between violence and local women that was hidden in the shadows of history.

研究分野：中国・台湾文学

キーワード：日本統治期台湾「蕃地」物語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

戦前から太平洋戦争終結までの間に日本統治期台湾の原住民居住地「蕃地」に取材した日本語文学の作品は、佐藤春夫(1892-1964)の「魔鳥」(1923)や「霧社」(1925)を嚆矢とする。その後、山部歌津子「蕃人ライサ」(1931)、大鹿卓(1898-1959)の「蕃婦」(1931)、「タツタカ動物園」(1933)、「野蛮人」(1935)、中村地平(1908-63)の「蕃界の女」(1939)、「霧の蕃社」(1939)、「蕃人の娘」(1940)、「長耳国漂流記」(1940)、真杉静枝(1901-1955)の「征台戦と蕃女オタイ」(1939)、「蕃女リオン」(1941)、「阿里山」(同)、「リオン・ハヨンの谿」(1941)、野上弥生子(1885-1985)の「台湾」(1942)、坂口れい子(1914-2007)の「時計草」(1943)、丹羽文雄の「台湾の息吹」(1944)など多くの「蕃地」由来の作品が創作された。戦後は台湾からの引揚者である坂口れい子(1914-2007)が、「蕃地」で生活した実体験をもとに「蕃地」シリーズを創作した。「ビッキの話」(1953)、「蕃地」(1953)、「蕃婦口パウの話」(1960)などの作品によって坂口は「蕃地作家」と呼ばれるようになる。津島佑子(1947-)は坂口の創作から半世紀が過ぎた2008年に『あまりに野蛮な』を執筆し、日本統治期台湾の原住民と霧社事件の傷痕をめぐる問題をふたたび俎上に載せている。このように、台湾の「蕃地」とは日本統治期台湾の光と影を体現する好テーマとして、一貫して多くの日本人作家の創作対象とされてきた。

日本作家だけでなく、1990年代には舞鶴やリカラッ・アウーらの台湾作家も日本統治期の山地を舞台として描き、魏徳聖監督の長編映画『セデック・バレ』(2011)も日本の理蕃政策が台湾山地住民にあたえた傷痕の深さを描いている。

本研究の当初の背景は、こうした日台の「蕃地」物語の系譜を踏まえたもので、坂口禰子の作品を戦前戦後を通して考察した拙論「坂口禰子の台湾蕃地小説とその系譜——戦中と戦後を通して」(2015)における問題意識に続くものとして構想した。

「蕃地」の物語を論じた主要な先行研究としては、尾崎秀樹の「霧社事件と文学」(1970)、河原功の「日本文学に現われた霧社事件蜂起」(1981)、「大鹿卓「野蛮人」の告発」(1986)、垂水千恵(横浜国立大学)の坂口禰子論「台湾文壇の中の日本人——坂口禰子と台湾作家」(1994)などがある。

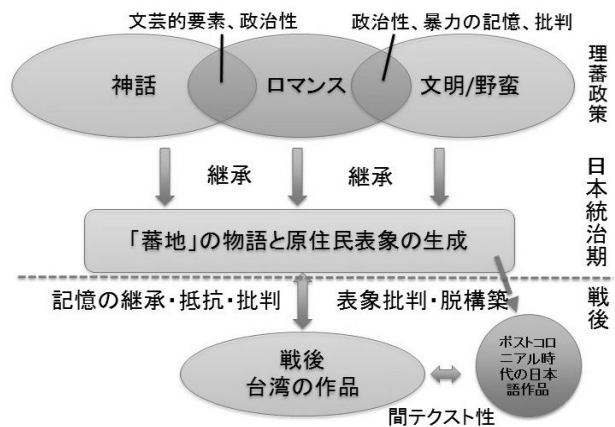
2. 研究の目的

上述したように、戦前から戦後にかけて書かれてきた日台の文学作品や映画の中には、日本統治期台湾の「蕃地」をテーマやモチーフにした物語がひとつ系譜をなしている。日台の作家はそれぞれの性別やアイデンティティ、時代性によって台湾原住民を描き、時にそれは内地男性と原住民女性とのロマンスのプロットで表されたり、時に文明/野蛮の類型によって表現されたりしている。「蕃地」をテーマとしたテキストに描かれるこのような形式や表象は、宗主国/植民地、文明/未開といった近代の概念の中で形成されたものであり、かつ多分に政治性を帯びたものである。「蕃地」テキスト内のこうしたファクターに注目して、日台の作品を系統的に検討した先行研究は管見の限りまだない。本研究の目的は、こうした観点から「蕃地」の物語を系統的に読み解き、「神話」、「ロマンス」、「文明/野蛮」の各テーマから考察し、これらの要素が「蕃地」物語及び原住民表象生成のメカニズムにどのように関係しているのかを明らかにするものである。

3. 研究の方法

自身の坂口禰子及び「蕃地」のロマンスをめぐる論考を骨格とし、それに加えて他の「蕃地」作品の精読と分析を進めた。分析の対象とする作品から「神話」、「ロマンス」、「文明/野蛮」というテーマを抽出し、分析結果をもとに「蕃地」の物語及び原住民表象生成のメカニズムを考察した。研究計画に挙げた作品群を精読し、これらの作品の中から「神話」、「ロマンス」、「文明/野蛮」というテーマを抽出した。同時に坂口れい子の未発表作品の整理とテキストのデータ化を進め、同テキストの「蕃地」の物語の系譜における位置付けを考察、分析した。

図1 「蕃地」の物語及び原住民表象生成のメカニズムの概略図

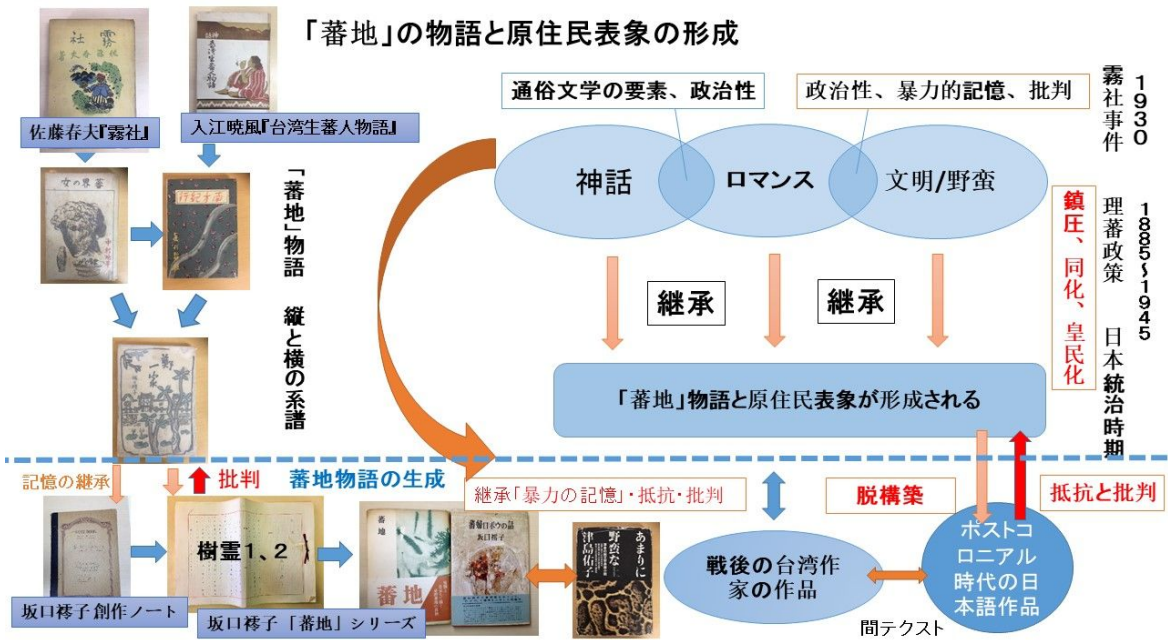


4. 研究成果

「蕃地」の物語における「縦の系譜」、即ち戦前戦後の「蕃地」物語の継承と生成、並びに「横の系譜」、主に坂口れい子の蕃地物語の生成プロセスを明らかにした。

(1) 「縦の系譜」で重要な研究成果は、「神話」、「ロマンス」、「文明と野蛮」の三つの要素が戦前戦後を通して「蕃地」の物語の継承と作品群の生成に重要な役割を果たしていることであり、これらの要素が次作品に引き継がれていくことで、台湾の「蕃地」をめぐる表象が創造され、また受容され、「蕃地」物語と原住民表象が形成されてきたという点である。

国際学術研究会「現代中国語圏文藝における逸脱の表象」(2018年6月)では、発表「中村地平の南方憧憬と台湾表象— その初期作を中心に」によって、中村の初期作品に顕著な南方への憧憬と台湾表象の生成プロセスをロマンスの類型に基づき検討した。中村の作品において典型的に認められるのは、近代文明に由来する深刻癖を背負いこんだ内地の知識人男性が、南方台湾で健康的な精神と肉体に接し、その文明病が癒されていくという対比関係である。そして両者の関係性は往々にして「蕃地」のロマンスという類型のなかで表現されていることを指摘した。論文「試析台湾蕃地書写中的“蕃女”形象與恋情故事架構」では、こうしたラブロマンスの類型は、真杉静枝の戦前の作品、坂口れい子が戦後に書いた「蕃地」作品にも顕著であることを明らかにした。



(2) 横の系譜では主に坂口稗子の蕃地物語の生成プロセスを、今回発見した「樹霊」などの新しい資料を中心に検討し読み解いた。プロットやテーマ、登場人物を分析した結果、坂口の戦後の代表作である「蕃婦ロボウの話」(1960)は、未発表作「樹霊(1)」「樹霊(2)」の創作によって構想された蕃地の物語であることが明らかになった(下表参照)。その内容は、国際学術研究会「日本統治期台湾の女性— 文学創作における山地女性表象の生成について」にて「坂口れい子の「蕃地」書寫— 日治時期台湾日人作家書寫中的山地女性形象」として発表した。「樹霊(1)」「樹霊(2)」は本研究を通じて発見した新資料であり、今後の台湾「蕃地」表象を読み解く研究において重要な文献になると考えられる。

坂口稗子「蕃地」の物語の生成(『蕃婦ロボウの話』の創作プロセス)

作品名	執筆発表	登場人物	題材	プロット及びテーマ	神話	ロマンス	文明野蛮	霧社事件	内地
樹霊(1)	1957? (未発表作)	鳥丸次平(熊本出身の証人) ワリス(道案内の「蕃人」) 石川警部 中年の蕃婦—加納巡査	①熊本八代からの台湾入植 ②霧社事件と事件後の「収容所」の強制移住中に起きた加納巡査の死	①霧社事件後、収容所の川中島社への移住。集団移住中、中年の蕃婦が恐怖にかられて護衛の加納巡査を崖の下へ突き落とす。 ②鳥丸巡査が、道案内の「蕃人」ワリスについて駐在先へ向かう途中、霧社事件で倒れた数百の霊魂を樹木の間にいて、鳥丸に妄想に取り付かれ迷ったワリスを銃剣で突き刺してしまう。 ③霧社事件の怨念	○	×	△	◎	◎
樹霊(2)	1958? (未発表作)	鳥丸次平 ワリス 大川判事 蕃婦ロボウ—加納巡査	①台湾入植者の生い立ち ②霧社事件と事件後の「収容所」の強制移住中に起きた加納巡査の死	①孤児であった鳥丸の貧しい生い立ち(舞台:熊本八代) ②鳥丸の裁判(舞台:台中埔里の監獄) ③蕃婦ロボウの物語(舞台:川中島の渓谷、台中埔里の監獄) ④霧社事件の怨念	○	×	△	◎	◎
蕃婦ロボウの話	1960 (詩と興実)	老蕃婦ハツエ(語り手) 私(聞き手) 蕃婦ロボウ—片山三郎巡査	①霧社事件後の「収容所」の強制移住中に起きたロボウと片山巡査の死	移住先の蕃婦ロボウが若い巡査片山三郎に夫ノーマンの面影を見出し、二人は東の間の恋に落ちる。強制移住の隙でロボウが片山を道連れに身投げした。(川中島の渓谷と「蕃地」中原)	◎	◎	△	◎	×

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

小笠原淳、坂口れい子の「蕃地」書寫 日治時期台湾日人作家書寫中的山地女性形象、日本統治期台湾の女性 文学創作における山地女性表象の生成について報告・論文集、2019年、1-8、査読なし

小笠原淳、試析台湾蕃地書寫中的“蕃女”形象與恋情故事架構、東亞視域中的作家流徙與文學創生國際學術工作坊論文集、2017年、255-263頁、査読なし

〔学会発表〕(計 3件)

小笠原淳、坂口れい子の「蕃地」書寫 日治時期台湾日人作家書寫中的山地女性形象、国際学術研究会『日本統治期台湾の女性 文学創作における山地女性表象の生成について』(熊本学園大学、2019年1月)

小笠原淳、中村地平の南方憧憬と台湾表象 その初期作を中心に、国際学術研究会『現代中国語圏文藝における逸脱の表象』(金城学院大学、2018年6月)

小笠原淳、試析台湾蕃地書寫中的“蕃女”形象與恋情故事架構、国際学術研究会『東亞視域中的作家流徙與文學創生國際學術工作坊』(中国・武漢大学、2017年9月)

〔図書〕(計 1件)

小笠原淳 他、ミネルヴァ書房、多様化する文学、漂泊する作家たち 中国と台湾をめぐる現代文学の歩み『教養の文学史』2018年、281-302頁、総ページ数341頁(281-302頁)、ISBN978-4-623-08031-1

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：黄美娥

ローマ字氏名：(Huang Mei-E)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。